

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 4 日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520860

研究課題名(和文) 近世日本国家領域境界域における物資流通の比較考古学的研究

研究課題名(英文) Comparative Archaeological Study on Circulation in Marginal Areas of Early-Modern Japan

研究代表者

渡辺 芳郎 (WATANABE, Yoshiro)

鹿児島大学・法文学部・教授

研究者番号：10210965

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、鹿児島県鹿児島郡三島村と十島村の考古学的踏査ならびに奄美瀬戸内町郷土館・図書館保管の旧家伝来資料の調査を実施し、近世日本国家領域境界域における物資流通の具体相を解明した。前者の踏査から、三島・十島において、日本本土域からの流通と、沖縄からの流通が重なり合っていることが明らかになった。後者の調査から、考古学資料と伝来資料との総合調査が、物資流通を明らかにするために必要であることを指摘した。また中国・琉球・薩摩と北海道・中国の両地域の物資流通を考古学的に比較検討することで、境界域における物資流通の共通性と独自性を抽出した。

研究成果の概要(英文)：This research sheds light on circulation of goods in the marginal areas of early modern Japan through archaeological surveys in Mishima and Toshima (Kagoshima Prefecture) and cataloging the heirlooms of an old family in Setouchi on Amami-Oshima (also Kagoshima Prefecture) held by the municipal museum and town library there. The archaeological surveys showed that trade from the Japanese mainland and from Okinawa overlapped in Mishima and Toshima. While cataloging the heirlooms indicated that a comprehensive survey of both archaeological finds and family heirlooms is necessary to trace the circulation of goods. Furthermore conducting a comparative investigation of the trade both between China, the Ryukyu Kingdom and Satsuma and between Hokkaido and China revealed the similarities and differences in trade in marginal areas.

研究分野：考古学

キーワード：近世国家領域境界域 物資流通 南北比較 陶磁器

1. 研究開始当初の背景

薩南諸島から奄美・沖縄諸島にかけての南西諸島域と東北地方から北海道にかけての地域は、ともに「日本」という領域が形成されていく過程で「境界域」として以前より注目を集めている。とくに近年では古代・中世に関しては、それぞれの地域での調査研究の進展とそれに基づく比較研究が盛んに行われている（加藤他編 2008、クライナー他編 2010 など）。一方、近世の国家領域の境界は、中世までの「ボーダーゾーン」としてのそれよりも明確になりつつも、近代以後のように明確な「ライン」として設定されるまでには至っていない。琉球は、薩摩藩を通じて幕藩体制下に組み込まれる一方で、中国（明・清）からの冊封を受けた「二重体制」であり、また松前と北海道のアイヌ民族との関係は、時期的に流動性を持っている。つまり両者は「境界」というより「境界域」と呼べる。

このような境界域は、古くより物資流通が盛んであり、それぞれの特産物などが境界域を介して取引される。境界域を形成する相互地域の異質性が交易活動を活性化させるとも言える。薩摩 - 琉球間では、「唐物薬種」や清朝磁器などが取引され、またその代価として昆布などが輸出された。北海道においてもアイヌ民族との間で俵物や昆布など北海産産物の加工品が取引された。また山丹交易を通じて中国清朝の物産などが輸入されていた。

この二地域の近世考古学的研究は、近年、関根達人による北海道の「内国化」をめぐる研究（関根 2014）や瀬川拓郎（2007・2011）などにより進められている。一方、筆者は鹿児島 - 沖縄における近世陶磁器の流通と生産技術の伝播について研究を進め（渡辺 2004）、池田榮史も沖縄側から沖縄陶器生産の具体相の解明を進めている（池田 2011）。ただし鹿児島本土、奄美諸島、沖縄諸島では調査研究が進んでいるが、これらの地域をつなぐトカラ列島に関しては、民俗調査が盛んであり（下野 2009 など）、近年文献史研究においても注目されているが（高良編 2004 など）、近世考古学に関しては諏訪之瀬島切石遺跡の発掘調査（熊本大学考古学研究室編 1994）が行われた程度にとどまり、ほとんど着手されていない。またふたつの「境界域」の比較についても、古代・中世に比べ、低調なのが現状である。

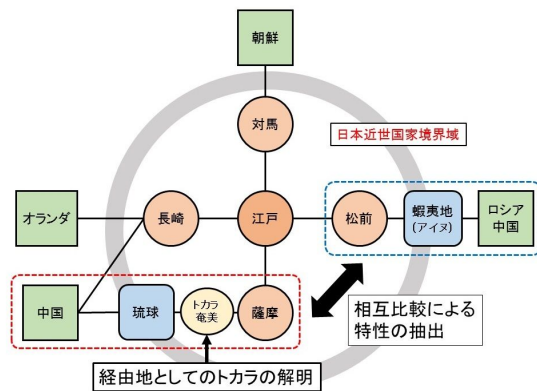
2. 研究の目的

本研究では、これら二つの境界域の特殊な様相を、考古学的資料（陶磁器など）を手がかりとして解明していくとともに、両者を比較検討することで、近世国家領域境界域における物資流通の特質を明らかにすることを目的とした。

本研究では、まず検討対象地域において流通した物質文化の検討を目的とするが、その場合、考古学資料として残りがよく、また生

産地と消費地とを結びつけやすい、つまり交易ルートを把握しやすい陶磁器が主たる対象となる。とくに南西諸島のトカラ列島では、これまで本格的な近世考古学に関するサーベイが実施されておらず、基礎資料に欠くことから、本研究では、三島村・十島村における有人島の踏査を実施し、各島の基本資料の整備を調査の主眼に置いた。さらに奄美諸島域についても、これまであまり取り上げられることのなかった近世資料を再調査することでデータ化をはかった。

それらと並行して、鹿児島 - 沖縄および東北 - 北海道における物資流通の調査研究を進め、それぞれの地域における時期的・地域的特徴を抽出することで、二つの境界域における物資流通の具体相を把握する。そして各具体相の比較を行うことで、両地域間の共通性と相違点を明らかにし、近世国家領域境界域における物資流通の様相を考古学的に理解することを目的とした。



3. 研究の方法

本研究では以下の3つの方法で研究を進めた。

- (1) 三島村および十島村における考古学的踏査の実施により、南西諸島域における陶磁器流通を考えるための基礎的資料を蓄積する。
- (2) 奄美瀬戸内町郷土館・図書館に保管されている旧家伝来陶磁器を調査することにより、南西諸島域において有力者層が所有していた陶磁器の具体相を明らかにする。
- (3) 鹿児島 - 沖縄および東北 - 北海道における物資流通の調査研究を進め、それぞれの地域における時期的・地域的特徴を抽出することで、二つの境界域における物資流通の具体相を把握する。

4. 研究成果

- (1) 南の境界域である琉球と鹿児島をつなぐ三島村、十島村の考古学的踏査により、近世本土産陶磁器の流通の様相は、鹿児島本土地域と大きな違いはなく、基本的に鹿児島経由の北からの流通圏に依存していたことが明らかにされた。ただし十島においては、清朝磁器が踏査した有人島すべてで採集されたことから、沖縄からの流通も密度が濃かった

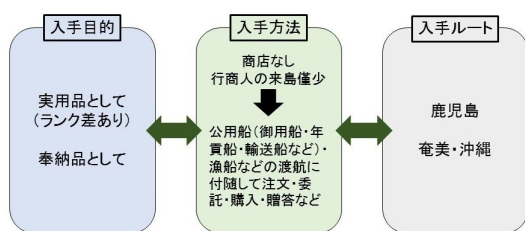
可能性を示唆していると言えよう。

また明治中期の文献史料を参照しつつ、三島・十島における陶磁器流通の特徴をまとめると以下ようになる。

陶磁器は、公用船をはじめとした、さまざまな理由による渡海に付随して入手された。

陶磁器の入手先は、鹿児島と奄美、沖縄の南北両方向があった。とくに十島においてその特徴が顕著である。

陶磁器入手の目的は、日用品とともに、神社や祠への奉納があった。後者の場合、使用することなくそのまま奉納された可能性が、諏訪之瀬島切石遺跡出土例や臥蛇島伝来陶磁器から推測される。



(2) 奄美大島瀬戸内町加計呂麻島の旧家(西家・武家)に伝来した陶磁器の調査により、南西諸島域における在地の有力者(与人)が必要としていた陶磁器の内容の一端が明らかにされた。その特徴は以下の通りである。

磁器の大皿の占める比率が高く、また陶器・磁器を問わず、皿・碗・鉢などの組物が多く見られる。これらは西家・武家という地域有力者が、さまざまな宴席や儀式的場において使用したものと推測される。

西家・武家ともに磁器の多くは肥前産であり、薩摩磁器は特殊な形態に限定されている。19世紀に入ると薩摩磁器がかなり流通していることが、近年の考古学的調査研究で明らかにされていること(渡辺 2007 など)から考えると、比率的に少ないようにも思える。しかし伝来陶磁器が上記のように宴席や儀式的場での用品であると考えれば、比較的質の高い物が選択されており、その場合、肥前磁器の占める比率が高くなったとも考えられる。

西家に伝わる、近世と推測される白薩摩・象嵌の丁字風炉ならびに白薩摩の唾壺が見られる点は、近世における豎野窯製品の流通形態を考える上で興味深く、やはり西家の社会的地位と結びつくものと考えられる。丁字風炉がまとめて伝来していることが、なんらかの社会的要因によるのか、西家特有の趣味嗜好に由来するのかは現段階ではわからない。

西家伝来の色絵双獣環耳花瓶は、幕末～明治初頭期の製品と推測される。これがいかなる経緯で西家に購入、伝来したかはわからないが、輸出用が多い色絵薩摩製品の国内流通の一端を知る上で興味深い資料である。

以上より基本的に廃棄物である考古学的

資料としての陶磁器と、伝来陶磁器とでは、その組成・内容において違いが見られることが確認できた。つまり島嶼に限らず、ある地域における陶磁器流通の実態を明らかにするためには、両者を総合して検討する必要があることを指摘できる。

(3) 関根達人は、アイヌ社会における日本系の考古学的資料の出土状況を精査することで、蝦夷地(北海道)の政治的な「内国化」に先行して、経済的なそれが進行していたことを示している。つまりアイヌ社会における威信財から生産用具にいたるまで、日本製品(和産物)の大量流入によるアイヌ社会の経済的自立性の喪失(=日本国内経済圏の北方への拡大)が生じていたと考えられると指摘している。その結果、18世紀にはアイヌ側に極めて不利な「不平等交易」が常態化するとともに、蝦夷地向けの製品(漆器・ガラス玉・蝦夷刀など)が生まれたとしている。

一方、池田榮史は、近世琉球における物資流通、とくに陶磁器流通について文献史料と考古学資料とを比較検討している。文献史料には、琉球と清朝との進貢貿易による物資流通については詳しく記録され、近世琉球の日用品が清朝製品に深く依存している状況がうかがえるとした。しかし考古学的資料を見ると、清朝磁器のほかに、薩摩藩経由と考えられる本土産陶磁器(肥前・薩摩)や沖縄産陶器もまた使い分けされながら流通している状況を示していることを指摘している。

また渡辺は、上述したように三島、十島が、本土産陶磁器については鹿児島本土域の流通圏に依存しつつも、とくに十島において沖縄経由の清朝磁器が流通している状況を示し、多層的な流通ルートがそれらの陶磁器を島嶼にもたらしたことを指摘している。

以上の調査研究成果は、境界域をめぐるいくつかの論点を浮かび上がらせる。

ひとつは政治と経済との関係である。関根が指摘しているように、蝦夷地では政治的内国化に先行して経済的なそれが進行している。一方、近世琉球では、琉球王府が清朝との進貢貿易を掌握することにより、政治的枠組みが経済活動を規制する状況が見いだせる。同じ国家領域境界域でも異なる様相が把握できる。

このような違いの生じる理由を考える上で、もうひとつの論点として、国家と非国家との関係性がある。琉球王府と薩摩藩(幕府)とは、必ずしも対等な関係ではないとはいえず、国家と国家という関係で経済活動に対する規制・統制が可能になったのに対し、松前藩(幕府)とアイヌ民族とは国家と非国家という関係であるがゆえに、しばしば政治的枠組みを逸脱して進行する経済活動に対してアイヌ側が規制するだけの権力を持ち得ず、日本国内経済に依存せざるをえない状況が生み出されたと考えられる。ただしその中にあ

ってアイヌが日本製品を改変しながら、みずからの文化的コンテクストに取り込んでいる点は、政治、経済、さらに文化との関係性を考える上で重要であろう。

一方、政治と経済、国家と非国家という関係を考える際に、物資流通という形で示される経済活動の復元において、考古学資料が有効なアプローチであることが今回の研究成果としてあげられる。池田が指摘しているように、文献史料には清朝との進貢貿易には詳しい記録が残っているが、考古学的には、それ以外にも薩摩経由の本土産陶磁器や沖縄産陶器の流通が確認されている。また経済の内国化は、アイヌ社会における考古学資料の出土状況から明らかにされたものである。また三島、十島における陶磁器流通も、文献には現れにくい多層的な交易ルートが存在したことを指摘した。

以上、本研究の成果として、国家領域境界域の歴史的具體相の解明には、政治と経済、国家と非国家、文献史料と考古学資料という多面的なアプローチの必要性を指摘しえた点にあると言えよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

渡辺芳郎 2014 「鹿児島県三島村踏査報告」『鹿大史学』61号 pp.15-40 鹿大史学会(査読無)

渡辺芳郎 2014 「鹿児島県三島・十島における明治中期の物資流通について - 笹森儀助『拾島状況録』を中心として - 」『鹿児島大学法文学部紀要 人文学科論集』80号 pp.27-39 鹿児島大学法文学部(査読無)

〔学会発表〕(計5件)

渡辺芳郎 「南西諸島域における近世陶磁器流通」シンポジウム「近世日本の南と北 - 考古学資料からみた近世国家境界域 - 」(於鹿児島大学) 2014年10月25日

池田榮史 「考古学資料からみる近世琉球の流通と消費」同上

関根達人 「アイヌ社会における日本製品の考古学的痕跡」同上

渡辺芳郎 「南西諸島における近世陶磁器の流通 - 三島・十島における考古学的踏査から - 」鹿児島大学国際島嶼教育研究センター第148回研究会(於鹿児島大学) 2014年4月21日

渡辺芳郎 「鹿児島県三島村踏査報告」第60回鹿大史学会大会(於鹿児島大学) 2013年7月6日

〔図書〕(計1件)

渡辺芳郎編 2015 『近世日本国家領域境界域における物資流通の比較考古学的研究』平成24~26年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書 鹿児島大学法文学部 鹿児島大学リポジトリ掲載
<http://ir.kagoshima-u.ac.jp/handle/1023>

2/23018

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡辺 芳郎 (WATABE YOSHIRO)
鹿児島大学・法文学部・教授
研究者番号: 10210965

(2) 研究分担者

池田 榮史 (IKEDA YOSHIHUMI)
琉球大学・法文学部・教授
研究者番号: 40150627

関根 達人 (SEKINE TATSUHITO)

弘前大学・人文学部・教授
研究者番号: 00241505